青木周弼旧宅

青木周弼（1803～1864）は、江戸時代後期の蘭学（西洋医学）の名医である。瀬戸内海の大島で村医者の子として生まれた青木は、西洋医学と漢方医学の両方の分野で活躍した。

長州藩医の能美洞庵（1794-1872）に師事し漢方医薬を学んだ。30歳で江戸に渡り、深川で坪井信道のもとオランダ医学とオランダ語を学んだ。1839年、青木は江戸を離れて長崎に移り、1855年には皇室の医師に任命された。また、周弼の弟の研蔵も名医で、長州藩で天然痘・コレラ予防接種を共に推進した。

1859年、宣教師 William Muirhead（1822-1900）が長州藩向けに書いたイギリス史の漢文翻訳に携わった。同年、青木は萩の実家を改築し、全国から医学生を受け入れるようになった。現在、萩城下町にあるこの旧居は見学者のために保存されており、その中には倉庫から出土した青木研蔵を意味する「青研」の文字が刻まれた一分金も飾られている。研蔵は東京深川で事故死するまで、1869年から1870年にかけて明治天皇の専属医としての重きをなした。

また、研蔵の養子である青木周蔵（1844～1914）の生涯についても展示されている。明治時代には「青木子爵」として知られ、伊藤内閣、山形内閣では外交官、外務大臣を務めた。オーストリア、オランダ、イギリスの公使を経て、1906年から1908年まで駐米大使を務めた。青木は、同時代の真の国際化外交官・学者の第一人者の一人とされている。1849年にドイツの貴族エリザベート・フォン・ラーデと結婚し、娘ハンナをもうけた。二人の写真も展示されている。

住所：山口県萩市呉服町 2-37

電話番号：0838-25-3139（萩観光案内所）

営業時間 午前9時から午後5時（毎日）

入場料：100円

アクセス：萩中央公園から西へ徒歩2分

Google マップのリンクは[こちら](#)